

P. Schwartz-Shea and D. Yanow (2012) "SPEAKING ACROSS EPISTEMIC COMMUNITIES", in P. Schwartz-Shea and D. Yanow (2012) *Interpretive Research Design: Concepts and Processes*, Routledge, pp.130-139.

P. Schwartz-Shea and D. Yanow (2012) 「認識論的共同体を超えて対話する」 pp. 130-139.

➤ 紹介文

本稿は、解釈的手法並びにその哲学的基礎を専門とする Dvora Yanow と、政治学を専門とする Peregrine Schwartz-Shea の共著による論文であり、両者による解釈的手法の明確化を試みた書籍 *Interpretive Research Design: Concepts and Processes* (『解釈的リサーチデザイン：概念と過程』) の最終章に収められている。本稿では、実証主義的研究と解釈主義的研究という異なる認識論的コミュニティを横断する手法として混合手法を取り上げ、考察を行っている。

➤ 導入・概要

- 本書全体を通して、解釈的手法並びに研究の意義を明らかにしただけではなく、異なる認識論的基礎を有する実証主義的研究と解釈主義的研究がどのように対話を行うことができるかについて考察した。
- 本章は、実証主義と解釈主義という異なる認識論的コミュニティを横断する手法・研究デザインとして「混合手法(Mixed Methods)」をとりあげ、その可能性について検討する。

➤ 混合手法のための研究デザイン (130 - 135 頁)

- 混合手法を用いる研究分野によっては、解釈的手法や定性的手法が、「科学」の正当な方法ではないという議論・批判が投げかけられている。
 - ・ こうした批判は、主に二つのレベルでの混乱を背景に生じている。第一に「混合」の言語的意味に潜在する混乱と、第二に方法論的なレベルにおける混乱である。
- 「混合」の言語的意味に潜在する混乱について
 - ・ 「混合」という言葉は研究のどの段階に着目するかによって、多様な意味合いを有している。具体的には、データ生成の段階、分析の段階、研究プロジェクトや研究課題といった水準において、「混合」は多様に用いられてきた。

- ◇ 例えばエスノグラフィや参与観察を用いる分野では、長らく手法の混合が行われてきた。ここでの混合とは、観察、人々との対話（インタビューを含む）、文献資料調査といった、データを生成する際の三つの基本的なプロセスを意味している。
 - ◇ 同じ研究課題内での定量的手法と定性的手法の組み合わせとして「混合手法」という語彙を用いた例に、Journal of Mixed Methods Research の編集者 Tashakkori and Creswell (2007a: 4)による混合手法の類型がある。ここでは、データ収集とデータ分析の組み合わせ（例：フォーカスグループとアンケート調査、統計分析とテーマ分析等）、異なる形態のデータの組み合わせ（例：数値及びテキスト）、抽出法の種類（無作為抽出と優位抽出）、結論の種類（客観的と主観的）等がある。
 - ◇ 政治学のサブフィールドである比較政治学では、同じ研究における特徴的な形態や伝統の混在を含意する用語として「混合」が用いられてきた。この分野において「混合」とは、事例研究と統計分析の組み合わせを意味する（Ahmed and Sil 2009; Chatterjee 2009）。
 - ◇ 同じ研究課題にて異なる研究の伝統を行き来する言葉として、「混合」を提唱する研究がある。ノーベル賞受賞者の Ostrom の研究は、フィールド観察から得られた知見をモデル化し、実験室において検証した。Poteete (2010)は上記の研究について、「フィールド観察によって得られた知見の一般化可能性は、実験を使って評価することができる」と言及している。
 - ◇ 伝統的な定性的方法の地位と正当性を回復するために、戦略的に「混合手法」を掲げるものもある。Journal of Mixed Methods Research の編集方針は、「混合手法」を「定性的・定量的な手法を用いて、データ収集・分析、結果の統合、推論を行」うものとして定義し、「研究の定量的側面と定性的側面を明確に統合」した論文を掲載すると述べている（Journal of Mixed Methods Research 2007）。
- 「混合」の方法論的なレベルにおける混乱について
 - ・ 混合された方法(methods)が、社会的現実 (social realities)と認識能力(know-ability)についての異なるもしくは対立する概念に基づいている場合、論理一貫性や哲学的に首尾一貫しない研究を生み出す可能性がある（この点は、Blaikie 2000 や P. Jackson 2011: 207-12 の指摘を参照）。敷衍すると、一つの問いに取り組む研究の中で、実証的研究が基盤とする存在論的立場と解釈的研究が基礎とする認識論的立場の両方を

受け入れることは、論理的に大きな困難を伴う。

- ◇ 例えば、調査票に社会的現実が忠実に反映されることを前提とする研究者が、同じ研究課題に対して、局所的知識(local knowledge)と複数の社会的現実に基づいたデータ生成・分析方法を用いることは、研究の原則に反することになる。このような組み合わせでは、唯一の真実を追求するために、解釈的研究が論点とする(interpretive research questions)意味づけの曖昧さや多様性を無視もしくは否定することになる。
 - ◇ Blaikie (2000 : 274)は以下のように述べている。「異なる(と仮定される)現実を扱う方法によって生成されたデータを組み合わせることはできない。どのような方法を用いたとしても、単一の「絶対的な」現実("absolute" reality)に関連するデータを用いて、複数の「構築された」現実("constructed" realities)に関連するデータの妥当性を検証(to test the validity)することは不可能である。
- ・ 存在論、認識論的な前提を異にする研究を「混合」する中で、研究のリサーチクエスチョンが変容する可能性がある。
 - ◇ 例えば Schram(2002)の研究は、複数のリサーチクエスチョンを含む研究テーマを探求しようとした際、それぞれが異なるアプローチを採用する必要性が生じた。具体的には、社会福祉政策の変化を研究テーマとした中で、経済的变化が与える受益者への影響の測定(定量的リサーチクエスチョン)と、福祉の受益者にとって新しい政策が何を意味するか(解釈的または定性的リサーチクエスチョン)という問いが設定された。研究を進める中で、具体的な研究課題そのものが変化し、それとともに、その課題に対処するための研究デザインも変化した。
 - ◇ Blaikie (2000 : 274) は、それぞれの存在論的前提が同じである限り、「アプローチ/パラダイムを切り替えながら」、定性的手法と定量的手法を順次採用する可能性があると指摘している。その結果、一つの研究課題の中で混合手法が用いられること、もしくは一つの方法論(methodologies)において手法(methods)が混在することがあるが、1つのリサーチクエスチョンの中で方法論(methodologies)が混在することはないとされる。
 - ・ 混合手法における解釈主義的研究の位置付けをめぐっては、混合される手法の適切な順序が論点となっている。この議論における中心的な問題は、定性的・解釈的研究と定量的研究を同時に行うか、順番に行うか、後者であればどのような順序で行うか、

という点にある。これらの議論では、アプローチ間の区別が棄却され、解釈主義よりも実証主義的な探求の論理を強調する傾向がある(E.g. Collins et al.2007; Tashakkori and Creswell 2007b)。

◇ このような議論は、定性的研究や解釈的研究を定量的研究に従属させるだけでなく、解釈的研究の探求の論理や基準（再帰性など）の具体化を放棄し、解釈的・定性的手法から科学的根拠を剥奪している。

- 「方法論の多元化」を主張することは、混合手法の正当性を主張することと同じではない。前者は、ある学問領域において使用されているあらゆる手法(methods)のうち、一つまたは複数を利用するすべての研究に同等の地位を与えることを主張するものである。解釈の目的や前提、またその科学的位置づけがよく理解されていない場合、何が混ざっているのか、何を混ぜることができるのかといった、方法論や手法の混乱が起りやすくなる。

➤ **認識論的共同体の境界を越える：研究プロポーザルの審査と認識論的共同体の暗黙知(135-137 頁)**

- 研究計画とは、研究プロジェクトの目的に照らして、自身の研究上の選択を正当化及び説明するための論拠を示すものである。
 - 例えば解釈的研究者は、研究課題を定義した上で、特定のアクターの役割や特定の資料を選択したことについて、他の認識論的共同体に属する者からさらなる正当性を求められる可能性がある。しかし、著者は自分が所属する認識論的共同体のメンバーを想定し記述することから、上記の基準は共同体が共有する暗黙知の一部であり、多くの場合明文化されない。
 - プロポーザルの読者や査読者が研究者とは別の認識論的共同体に属している場合、研究課題に対する適切な研究手続きについて、否定的な評価を受ける場合がある。
- 方法論が多様化した現在の環境では、研究者が自身の意図する目的を注意深く伝えるとともに、審査担当者がその評価に注意を払う必要がある。このような複数の方法論の科学的根拠が認識されることで、それぞれの探求の論理に適した基準で提案や研究が評価されるようになる。

➤ 結論 (139 頁)

- 本書全体を通して、様々なアプローチにおける探求の論理の違いと、それらの違いを検討する上で共有すべき概念的な語彙を提供した。
- 著者らは多元主義の立場をとっており、実証主義的な基準と同様に、解釈的研究デザインが他のすべての研究に適用できると考えているわけではない。特に、知識を獲得する上での学問体系および方法と、それら进行评估するための基準は、認識論的共同体によって異なる。
 - これまでに検討したように、解釈的方法論(methodologies)は、意味づけの曖昧さ・多様性の理解を中心に、知識への本質的な貢献を行っている。我々は、技術的、方法論的、哲学的に一貫した「方法論」に支配された探究の世界を望んでいるのではなく、解釈・定性的な研究方法にも居場所が存在する社会科学の世界を望んでいる。